

平成 30 年 5 月 8 日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：24520307

研究課題名(和文) アンジェラ・カーターの作品におけるジェンダー・パフォーマティビティの研究

研究課題名(英文) Gender Performativity in the Writing of Angela Carter

研究代表者

生駒 夏美 (Ikoma, Natsumi)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：60365525

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：アンジェラ・カーターの小説に表れるジェンダー・パフォーマティビティが、彼女の二年間の日本滞在の影響を強く受けたものであることを、アーカイブ研究、手記の出版、比較文学的な研究から明らかにすることができた。カーター研究において、彼女の日本滞在中の出来事や日本の文学、演劇作品の影響などはあまり研究されていない分野であった。本研究はその空白を埋めるものである。特に、カーターの同棲相手であった荒木氏のメモワールを英訳して出版したことは、本国イギリスでも大きな注目を浴び、BBC2から取材を受けた。本書の出版、ならびに英語での学会発表や論文発表を通して、カーターの日本研究者として国際研究の場にも貢献した。

研究成果の概要(英文)：This research clarified that the gender performativity in the writing of Angela Carter was strongly affected by her two-year stay in Japan. The research was consisted of archival research, translation of a memoir, and comparative literary analyses. The influence of Japan and Japanese culture to her works had not been studied fully, so my research contributed to fill in the gap. The publication of the English translation of the memoir written by Sozo Araki, Carter's ex-boyfriend, attracted much scholarly and general interests even in the UK, and I was interviewed by BBC2. This publication, and other presentations and publication in English, contributed to enrich further the scope of international Carter scholarship.

研究分野：英文学、ジェンダー

キーワード：アンジェラ・カーター 比較文学 ジェンダー アーカイブ パフォーマティビティ 日本の影響 女性性 国際研究

1. 研究開始当初の背景

没後20年を過ぎ、一時期のような熱狂は収まらずアンジェラ・カーターの研究はますます進展してきていた。しかし多くはシュールレアリズムやおとぎ話の語り直し、またジェンダーやフェミニズムとの関連での研究であり、欧米言説中心であった。カーターの作品は間テクスト性が強く、様々な文学作品の影響が指摘されているが、これまでは西欧の文学作品や理論のみが検討され、カーターの文学において、日本滞在前と日本滞在後が大きく異なっていることは認識されていたにも関わらず、日本との関連での研究はほとんどなされていない状況であった。

2. 研究の目的

本研究はカーターの作品内におけるジェンダー・パフォーマンス性に注目し、特にそれが日本の文学・芸術の影響を大いに受けている点に焦点を当てたものである。カーターは演劇のモチーフを多くの作品に登場させているが、それが俳優が仮面をつけるのとは異なり、自己を創出するパフォーマンスなものとして表出されるようになったのは、カーターの日本滞在後のことである。そこで、日本の演劇の伝統や文学のモチーフがカーターの作品内におけるジェンダー・パフォーマンス性に大きく影響したのではないかという仮説に基づき、研究することとした。カーターの日本滞在中の出来事や影響については研究がほとんどなされていなかったため、その研究上の空白を埋めること、また国際的なカーター研究に貢献することが研究の目的であった。

3. 研究の方法

研究は二つの方法で行なった。一方は伝記的研究で、カーターの日記などのアーカイブから彼女の日本での日々について調査するとともに、彼女が日本滞在中に同棲していた相手へのインタビュー、またその人物が書いた手記の英語翻訳を行った。アーカイブはロンドンの大英図書館にあり、実際に自筆の日記やノートを手にとることができる。知られていない出来事の記述も多く、カーターの研究には大いに有用であった。そこでイギリス出張を行い、集中的にアーカイブ研究を行なった。

同棲相手の手記の翻訳と出版は英語で行うこととした。これは研究目的に記述したように、カーターの国際的な研究の場に貢献することが重要と考えられたからである。今後のカーター研究に資するため、翻訳にはこの手記を研究史に位置付けるための解説をつけ、また日本の事物への言及にも細かく注をつけることとした。

もう一方は比較文学的研究である。日本の

文学作品や芸術作品、特に文楽や歌舞伎、谷崎潤一郎や川端康成、三島由紀夫などがカーターの文学に与えた影響を検討した。直接的にカーターがこれらに言及しているエッセーの検討だけではなく、カーターの小説にどのように反映しているかを検討した。表層的な比較研究に止まらないよう、歴史的な文脈に注意することを心がけた。カーターは小説を書く前に綿密に調査をする作家だったので、日本の文化や社会についても研究していたことが考えられたので、カーターが着目した文化芸術や事象について、歴史を掘り下げるようにした。

これらの研究成果はいずれも国際的な学会で発表を行なうこととした。論文発表も国際的な学術誌で行い、国内のみではなく、海外への研究効果の波及を狙った。

4. 研究成果

補助期間を通じて、順調に研究を進められた。複数回のイギリス出張で、ロンドンの大英図書館でのアーカイブ研究を行った他、イギリスでの国際学会にも二度参加し発表を行なった。国内でも国際学会に多数参加し、発表を行なった。

平成25年度はカーターの小説世界におけるパフォーマンス性、特にジェンダー・パフォーマンス性に関する発表を二件行なった。日本比較文学学会大会における発表では、カーターがその作品中に、ブルーストや谷崎といった文学界の大御所的な男性作家の作品との間テクスト性を用いることによって、彼らの作品を模倣しながらも彼らのよってたつ女性観の攪乱につながっていることを指摘した。これは演技という意味でのパフォーマンスをカーター自身が作家活動を通じて行なっていることを意味し、カーターがモチーフのみならず、その語りによってもジェンダー・パフォーマンス性を実践し、攪乱につながっていることを明らかにした。神奈川大学での講演においては、カーターの日本滞在期間の体験が、カーター自身の「女性観」を異化させることにつながった過程を明らかにし、以後の作品にその感覚が活かされている様子を発表した。

平成26年度は主にカーターが日本滞在中に執筆した文章において、いかにジェンダー・パフォーマンス性の考え方が発展してきたかを分析した。特に短編集 Fireworks と長編小説 The Infernal Desire Machines of Doctor Hoffman に登場する「演技」に関係した箇所を抽出し、彼女らが彼女が実体験で経験した日本のジェンダー規範と、それに強いられて「女性性」を演じた経験に密接に結びついている点を論じた。この論文は9月にオックスフォードで開催された学会 Women Writing Across Cultures にて発表し、好評を得た。またイギリスでのアーカイブ研究を行なった。

平成27年度は、カーターが日本に滞在している間に交際していた荒木創造氏が日本語で書いたメモワールの英語訳をほぼ完成させた。また前年度にオックスフォード大学で口頭発表した論文を、学術誌 *Angelaki* に投稿するために改訂する作業を行なった。この論文では、カーターが日本滞在中に執筆したさまざまな文章を検討し、いかにカーターがジェンダー・パフォーマンスの考え方を発展させたかを分析した。また再度大英図書館でアンジェラ・カーターの手書原稿の詳細な検討を行ない、その研究結果を前述した論文にも盛り込んだ。国際基督教大学で開催された国際シンポジウムでは英語での口頭発表を行ない、カーターの童話作品や童話のモチーフを使用した作品における社会批判を検討した。

平成28年度は荒木創造によるメモワールの英訳に、大英図書館でのアーカイヴ研究の成果をまとめた論文を加えた書籍が完成し、出版社との交渉を行った。国際基督教大学での国際シンポジウムでは、カーターのパンパイヤ作品についての口頭発表を英語で行った。1月に英国ブリストルで開催された *Fireworks: The Visual Imagination of Angela Carter* という国際学会に参加し、口頭発表を行った。この学会ではカーター学会創設の呼びかけもされ、国際カーター学会の創設メンバーとして貢献することとなった。3月には横浜の神奈川大学で開催された国際学会 *Re-Orienting the Fairy Tale* に参加し、口頭発表を行った。さらに Routledge 出版から出されている学術誌 *Angelaki* に論文が掲載された。学術誌 *Gender and Sexuality* にも論文を掲載した。

最終年度はこれまでの研究成果を複数書籍化し、出版することができた。一本は Routledge から単行本 *Women Writing Across Culture: Present, Past, Future* に所収され、もう一本も単行本 *Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Fairy-Tale Adaptations across Cultures* に所収で Wayne State University Press より近日刊行されることとなった。さらにもう一本イギリスの Palgrave から *Pyrotechnics: The Incandescent Imagination of Angela Carter* が近日刊行予定である。いずれも海外の著名な出版社から英語での出版を果たすことができ、国際的なカーター研究において重要な貢献をすることができた。

またカーターのメモワールを *Seduced by Japan: A Memoir of the Days Spent with Angela Carter* として英語で出版することができた。アンジェラ・カーターが日本滞在中の出来事について荒木創造氏が記したものを英訳し、海外の読者に向けて注を付し、またアーカイヴ研究で得られた知見を最終章に盛り込んだもので、英宝社から出版した。この書の企画から出版まですべて研究代表者が管轄した。カーター研究において、これ

まで日本滞在中の出来事は空白期間とされていて、特に荒木氏については謎とされてきた。本書はその空白部分を補う大変重要な書となり、出版直後から大きく注目された。近く BBC2 で放映されるカーターのドキュメンタリー番組でも取り上げられることとなり、研究代表者もインタビューを受けた。特に、1970年代の東京をその思想や経済などに位置付けようとした本書の目論見が、当時のカーターの理解へとつながったようだった。本書がカーター研究のみならず、イギリスの一般文学愛好家にとっても重要なものと評価されたことがわかる。カーター研究の周知に貢献できたと感じている。

いずれの出版においても、カーターの文学作品の分析で重要なパフォーマンスの概念が日本の演劇や文学、日本での生活の大きな影響を受けて発展されたものであることを国際的な学術研究の形で知らしめることができ、カーター研究における日本の影響の位置を大きくすることができた。

また国際共同研究加速基金を得て、イギリスのイースト・アングリア大学でスティーン・ベンソン教授との共同研究を開始した。イースト・アングリア大学では招待講演を行った。またベンソン教授と共同で、大英図書館での招待講演も行なった。いずれの講演でも、カーターの日本研究者として重要な貢献を果たすことができ、また日本とカーターのつながりについて海外の研究者や読者に知らせることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 3 件)

Natsumi Ikoma, "Wolves and Witches: Sexual Outcasts in Angela Carter's Fairy Tales", *Gender and Sexuality*, 査読あり、12巻、2017、9-26

Natsumi Ikoma, "Encounter with the Mirror of the Other: Angela Carter and Her Personal Connection with Japan", *Angelaki*, 査読あり、22巻、2017、77-92

生駒夏美, 「アーカイヴ研究の愉悦」, *Albion*, 査読あり、62巻、2016、72-76

[学会発表](計 11 件)

Natsumi Ikoma, Stephen Benson, "Angela Carter: The Bloody Chamber and the Fairy Tale", *The British Library*, 2018年3月19日

Natsumi Ikoma, "Angela Carter's Marionette and Japanese Theatre Tradition", *University of East Anglia*,

2018年1月15日

Natsumi Ikoma, "Monstrous Marionette: The Introspective (Japanese Fairy Tale of Angela Carter)", Re-Orienting the Fairy Tale, 神奈川大学, 2017年3月29日

Natsumi Ikoma, "Inscrutable? No, Terribly Scrutable: Carter and the Japanese Signs", Fireworks: The Visual Imagination of Angela Carter, University of Western England, Bristol, UK, 2017年1月9日

Natsumi Ikoma, "De-Sexing the Vampires and Slayers: Angela Carter's Caricature of Vampire Narrative", CGS/ICC symposium: Liminal Existence in Art and Literature, 国際基督教大学, 2016年11月12日

Natsumi Ikoma, "Wolves and Witches: Sexual Outcasts in Angela Carter's Fairy Tales", CGS/ICC symposium: Fairy Tales: Their Legacy and Transformation: Gender, Sexuality, and Comparative Literature, 国際基督教大学, 2015年11月7日

Natsumi Ikoma, "To Miss the Missing Mother: Absence of Real Mother", Asian Studies Conference Japan, 明治学院大学, 2015年6月20日

Natsumi Ikoma, "Ideal Mothers: Missing Mothers", CGS Research Seminar: Idealization of Mothers, 国際基督教大学, 2015年2月14日

Natsumi Ikoma, "Encountering the Other", Women Writing Across Culture, St Hilda's College, University of Oxford, 2014年9月27日

生駒夏美, 「演じる体、演じられる性: アンジェラ・カーター試論」, 神奈川大学外国語学研究科特別講演, 神奈川大学, 2013年7月27日

¹¹ 生駒夏美, 「模倣と攪乱のパフォーマンス-間テクスト性をクィアする-」, 日本比較文学学会第七十五回全国大会, 名古屋大学, 2013年6月15日

〔図書〕(計 4 件)

Mayako Murai, Luciana Cardi, Natsumi Ikoma 他, _Re-Orienting the Fairy Tale: Contemporary Fairy-Tale Adaptations across Cultures_, Wayne State University Press, 近日発行

Marie Mulvey-Roberts, Charlotte Crofts, Natsumi Ikoma 他, _Pyrotechnics: The Incandescent Imagination of Angela Carter_, Palgrave, 近日発行

Pelagia Goulimari, Natsumi Ikoma 他, _Women Writing Across Culture: Present, Past, Future_, Routledge, 2018, 326

Sozo Araki, Natsumi Ikoma, _Seduced by Japan: A Memoir of the Days Spent with Angela Carter_, 英宝社, 2017, 175

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

生駒夏美 (Natsumi Ikoma)
国際基督教大学, 教養学部, 教授
研究者番号: 60365525

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

荒木創造 (Sozo Araki)